“You must change your ways.”

1992 年、ブラジルのリオデジャネイロで開催された最初の「地球サミット」で、12 歳の少女が行った「伝説のスピーチ」は今でも語り継がれています。6 分あまりのこの演説を行った少女の名はセヴァン・スズキ。自然豊かなカナダですごす彼女は、日々進行する環境破壊に自らの未来が不安になり、カナダの子どもたちの集まりを代表して、仲間たちで集めたお小遣いを使って会議に出席したのです。そして、会議の参加者に対し、「あなたがた大人たちに、どうか生き方を変えていただきたい（to tell you adults you must change your ways)」と訴えました。

それから四半世紀が過ぎた現在、さらに深刻さを増す地球環境問題と国際社会の状況を見ると、大人になったこの少女の願いを満足させるほどには世界は変わっていないようにも思われます。しかし、少しずつですが、世界は変わりはじめています。その背景に、さまざまな国際研究ネットワークが、地球環境問題に対する科学的な根拠を提示し続けてきたことがあります。IPCC [1]は、気候変動の原因が人間活動であることを実証し、それを根拠に 2016 年に「パリ協定」の発効が実現しました。生物多様性に関しては、IPBES [2]が次々に科学的評価報告書を公表し、国際的な取り組みの基礎を構築しています。また、2015 年の「国際土壌年」を契機に FAO [3]においても土壌保全の取り組みが強化されています。

農業環境変動研究センターが進める国際連携では、このような地球規模での環境問題に対する国際研究ネットワークへの貢献を目指しています。とりわけ、「地球サミット」を契機に国際条約が締結された、気候変動、生物多様性、および土地劣化の問題は、センターの担当する研究課題と一致するため、特にその取り組みを強化しています。その際、農業環境の類似したアジア地域での活動や、多くの研究蓄積がある水田稲作の研究課題については、リーダーシップを発揮すべく、研究グループの運営や国際シンポジウムの継続的な開催を進めています。本号では、最新の気候変動と土壌保全に関する国際ネットワークへの取り組みを紹介します。

農研機構 農業環境変動研究センター
温暖化研究統括監 八木 一行

科学を基盤とした国際研究ネットワークの果たす役割は、今日の国際社会でますます重要性を増しています。社会がそのあり方、生き方を変えるために、国際条約として締結された約束に対し、その実行のための科学的基盤を提供することは、研究機関の重要な責務です。

[1]IPCC　：気候変動に関する政府間パネル
[2]IPBES：生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム
[3]FAO　：国連食糧農業機関